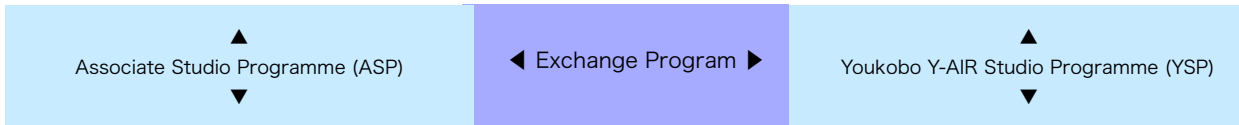


London/Tokyo Y-AIR Exchange Program 2018 活動報告



LTYE*プログラム 2018 活動報告

目次

- ・ 寄稿
 - 「門出とその先」 Graham Ellard
 - 「遊工房⇄ACME交換プログラム」 OJUN

1. LTYEプログラム2018活動概要

2. LTYEプログラム2018 参加作家エッセイ

- 「One Day in the 136 Bus」 堀内悠希
- 「写し換えの道具」 川越健太
- 「Finding words to go around」 Alice Jacobs
- 「体験を通して考えたこと」 Tuli Litvak

3. LTYEプログラム2018活動の総括、2019年へ向けて

*LTYE, London/Tokyo Y-AIR Exchange Program, since 2015

London/Tokyo Y-AIR Exchange Program, LTYEは、ロンドン芸術大学・Central Saint Martins (CSM) 校のCSM Associate Studio Program (ASP) と、東京藝術大学（東京芸大）と遊工房アートスペースとのスタジオプログラム（YSP）との間で展開する、若手作家のスタジオ活動を通じた相互交換プログラムで、2015年より毎年継続して展開している。双方の美大卒業後間もない若手作家にAIR体験を通し、異文化のダイナミックな環境での滞在を通じた調査・研究、制作・発表の枠組みが与えられ、各都市それぞれでの6週間、合計3か月の活動。期間中、芸術家や批評家等の専門家からの批評会を実施している。参加作家の選考は、対象者からの活動提案を受け、双方の大学教官のアドバイザーとの協議で決定される。

寄稿：「門出とその先」

Graham Ellard (ロンドン芸術大学CSM校教授, 本プログラムアドバイザー)



作品とその位置付けの関係を熟考するとき、芸術家は危険と隣合わせの道歩くことになる。作品や制作過程に完全に没頭することが必要になるときが何度もある。そのような細心の集中なしでは、思考や制作の道筋を確立し、継続するのが難しくなる。親密な身体的交流や直感的かつよく考えられた思考が一つの関係を可能にするように、その道筋（あるいは「フロー」とも形容されるもの）は作品とその作家を、これまで知られることなく、到達不可能であった事物や思考へと導いていく。

しかし、スタジオという高尚で、張り詰めて、ほとんど閉じた場所に常にいることは、他の事物には必然的に背を向け、他者の声、イメージ、物語、歴史（つまり文化）を無視し、否定することなのである。これらの要素は作品の文脈、その作品の意味が生成される文脈、そして作品が最終的に展示され鑑賞者との出会いによって生まれる文脈の一部になるにも拘らず、こうした態度はそれらに背を向けることを意味する。

世界から完全に遮断された実践のなかで生まれる作品はない。作品、あるいは少なくともその（複数の）起源は、あるところから、そして「何か」から生まれるのだ。その「何か」は、ときに何かを結びつけるようなものであり、組み合わせられたり、一致したり、矛盾したりすることによって生成される。しかし、結果として、作品は根本的に「相対的」なものだ。他のものとの関連のなかで、作品は自身を物語るのである。これは、作品とは一体、どういったものなのか、という問いである。なぜなら、美術作品は、それと似ている物とは、似ているようで（完全に）一致していないからなのである。

これは芸術家は、自身の行為のバランスをとれるようにならなければいけないという私の信念の冗長な表現である。つまり、世界の一部になりつつ（これは避けられず、不可避なものだ）、そして同時に（一時的で、程度にもよるが）できるだけ世界とは離れることとの間で、危険と隣り合わせの道歩くこと。実際、これは誤った例えである。その行為は一つの動きなのであり、直線に沿ったものでないのだ。それはある状態から別の状態への連続的でジグザクな運動なのである。ミクロ的な視点からマクロ的な視点へ、主観的な視点から客観的な視点へ、そして制作することの悦びから制作物に対する批判へ、という運動なのである。

レジデンシーの利点、とくに海外といった、慣習、文化、歴史、言語が極端に異なる国に滞在することの利点は、変化を促す可能性である。レジデンシーにおいて、芸術家はスタジオで制作に没頭できる時間を得ることができ一方で、慣れ親しんだ環境から引き離されることでもある。そして、もし、私が上述したことが、制作に対する完全なる専念と、適度に距離をとること、という二つの間を行き来する経験だとしたら、自分たちを再文脈化（外部から訪問者として、あるいは他者として）しようとする行為は、そうした経験をより強化しうるだろう。異なる環境に住むことは、自分たちの前提、習慣、「常識」といった物事に対するこれまで培ってきた価値観を刺激するだろう。もはや慣れ親しんで、鈍くなったレンズを通して世界を見るのではない。我々の観察はより鮮やかになり、我々が利用する様々な事物や、その用い方は、意図的であるにせよないにせよ、より多様で、複雑になり、微妙な差異をもったものとなる。

美術学校は近年、協力体制を充実させ、卒業生たちが 魅力を感じる都市で何ができるかという可能性を支援する役割を果たす必要性を認識し始めた。ロンドン芸術大学のカレッジの一つであるセントラル・セント・マーチンズ (Central Saint Martins, 以下、CSM) は、その名高い授業内容や、スタッフ、卒業生たちを通じて、世界中の学生たちを魅了する。また、大型のギャラリーや美術館や、小規模なインペンデント・ギャラリーやプロジェクト・スペースなどのダイナミックな文化があるロンドンという豊かさも魅力である。実際、これら二つは緊密に結びつき合っている。しかし、大学に魅了されつつも、学生たちは卒業と同時に、この街に残ることが困難になり、それ自体を正当化するのを難しく感じ始める。ロンドンという場所は、芸術家たちにとって、急激に住みにくい場所になってしまうのだ。賃貸可能なスタジオや手頃な値段の家を見つけるのが難しく、生活の質を外見上だけでも

取り繕うことさえ困難なのである。我々の大学は、ロンドンに住む卒業生たちが直面する困難を和らげないと、このダイナミックなアートシーンから恩恵を受けることはできないと認識したのである。つまり、これらのダイナミックな環境からの恩恵を受けることと、それに貢献するということだ。

東京藝術大学の卒業生たちも同様の困難に直面している。そして卒業後の1年間という大切な時期に受ける支援、妥当性、奨励は、彼らの実践を確立する上で非常に重要なのである。そして、これは卒業生たちがどのような支援を受けるべきかをという問いを投げかける。CSMにおいて、もっとも喫緊な問題はロンドンにおけるスタジオをどう確保するかという問題である。だからこそ、我々はAcme Studiosと提携し、共同のスタジオプログラム（Associate Studio Programme）を開始した。それは、賃料が減額されたスタジオを作家たちに二年間提供するもので、本プログラムに招待された作家やキュレーターたちによるスタジオ訪問も含まれている。こうした訪問では、ギャラリーや他の作家たちとの関係を築く重要な過程は、大学の授業やその講師陣たちによる制度化された文脈の外側で起きるのであり、学生ではなく作家である立場から行われる。

学生から作家への移行は、簡単なものではない。大学にいるときは違って、突然、自分が関心の対象に必ずしもならなくなり、周りが自分が行っていることに何の興味を持たないかもしれない。本プログラムは、この移行を容易なものにはしないが、少しだけ和らげることはできるのである。つまり、この移行的過程を、圧倒されるような突然のショックのようなものにするのではなく、よりゆるやかなものにするのだ。東京藝術大学についても、この問題は同様だろう。学生から作家になる移行をつくる重要な過程があるし、自分自身をより広い文脈で見つめ始める過程も同様にある。そして、東京藝術大学については、重要な問題は国際化と日本を越えた関係を築くことである。

遊工房アートスペースは、上述した多くの問題に取り組む方法として開始されたロンドンと東京のY-AIR交換プログラム（London/Tokyo Y-AIR Exchange Program。以下、LTYE）の設立に関する主要な発起人である。つまり、こうした考えによって、2012年に我々の最初の対話の実現したのである。それらを経て、LTYEは、CSMと東京藝術大学の卒業生、双方を引き合わせるという素晴らしい国際的関係を構築するとともに、卒業した作家たちを支援する方法に貢献する革新的でユニークなモデルとなっている。

本プロジェクトの根底には、四つの組織から形成された共同団体がある。しかし、作家たちにとっては、それらは彼らが体験する組織ではない。作家たちは、人々に触れ、人々をめぐるといった交流や協働が作品の制作を促進し、長い未来へとつながる継続する効果、継続する恩恵、生き生きとした感動の源が生まれるのである。新しく目まぐるしい環境の中での、人々とのつながり、紹介、友人関係、何かを語る必要性、そして自身を反省し、再び語り始める必要性。これらは作品制作を行う上で不可欠な経験であり、自身がどのような芸術家であるのかを認識することは、おそらく、自身がこうありたいと思う作家像を想像する以上に重要なことなのである。

来年で5年目を迎える提携プログラムが、これまで達成してきたことを祝うのはよいタイミングだろう。自らを美化するようなLTYEという構想の物語ではなく、むしろ、どのようにして生まれてきたのかという文脈の説明と、本プログラムに参加してきた若手作家たちが達成してきたことを強調することを通じて、祝福の意を表したい。このプログラムは彼らのために設立されたのであり、参加作家たちはこうした目的を代表しているのだから。LTYEプロジェクトと同様に、この展示会の目的は彼らの達成を主張するものではなく、彼らが自身の創造のための、刺激や機運、豊富な体験や、機会を生み出すことなのである。



寄稿：「遊工房⇄ACME交換プログラム」

OJUN（東京藝術大学教授、本プログラムアドバイザー）



このプログラムが始まって早、来年で5年目を迎えようとしている。これまで日本、イギリスからアーティスト各8人ずつ計16人が参加した。東京藝術大学とロンドン芸大セントラル・セント・マーティンズ校を修了した若いアーティスト達が双方の制作に協力、あるいはシェアスタジオとしている遊工房とACMEを通して交換交流を継続している。

双方の大学とAIRの連携によりこのプログラムは実施されているが、なによりも優れた資質と豊かな可能性に恵まれ、意欲と情熱にあふれたアーティスト達がいてこそ、このプログラムであることは言うまでもない。今年もその若いアーティスト達4人がロンドン東京を往還し滞在制作を体験した。作家は毎回代わるが、それぞれがロンドンと東京で体験するコースのようなものはある。ACMEと遊工房での制作、滞在に関して遊工房は施設内の宿泊施設で行うが、ロンドンでは以前は来日するアーティストの部屋に日本から行くアーティストが滞在するという文字通り宿泊までエクステンジしていたが、このところは人の家にホームステイをしている。

また双方のアーティスト達が修了した東京藝大とロンドン芸大CSMを訪問しその施設や学生たちの様子を見学することもメニューになっている。特に東京藝大はキャンパスが東京台東区上野と茨城県取手市にあるのでロンドンからのアーティストは2か所を見学する。毎年、遊工房のスタッフと共に訪問してくれて、各科のアトリエや特色ある施設や工房スタジオを興味深く見学する。特に取手校地には共通工房があり、石材、木工、金属、塗装、ガラスなど専門性に特化した機材がそろっているため、訪問したアーティストは自身の作品のヒントを得てそこで発注して製造する場合もある。双方のレジデンスがそれぞれの大学、教育機関と連携しているからこそ、このような活用や対応が可能となっている。お互いの大学を訪問し、そこでどのような芸術、美術教育が行われているのか、彼らは目にするようになるのである。今年の4人のアーティスト達もそれぞれの地で様々な体験をしたことだろう。

遊工房ではACMEからAlice Jacobs、Tuli Litvakの2人による制作展示を見ることが出来た。Aliceの映像とパフォーマンスは旧作新作も含め作家の対象へのまなざしと映像シーンがよくリンクして独特な緊張感のなかでクオリティある空間を作り上げていた。Tuliの鍼灸治療をテーマにした映像作品は自身のロンドンで実際に現地の鍼灸師から受けている治療を基に遊工房の庭をロケーションにして制作されているが、ユーモラスな表現は楽しめた。また、映像の中でモデルを務めていた女性は私の大学の交換留学生プログラムでタイのシラパコン大学から短期留学で来ている学生だった。彼女は、去年のY-AIR(AIR for Young)に東京サイドから参加したアーティスト磯村暖さんがシラパコンでレジデンスをした時からの友人で、今回の彼女の東京滞在中に制作協力を彼から受けているのである。

このようにアーティスト同士が自分たちで時を経て移動し交流を重ね接点を持ち継続的な関係をつくっているのだ。日本には「縁」という言葉がある。もともとは仏教用語であるが、人の世のより良い構造と関係を願う言葉だ。アートやアーティストにとっても必須用語であろう。単に情報だけではなく、心身を伴うネットワークが毎年生まれているのだ。

東京からは、川越健太、堀内悠希の二人がACMEでレジデンスをし、帰国後遊工房にて報告会を持った。川越さんは絵画と写真の関係を構造的に探りそこから新たなイメージをつくり出そうと試みているが、報告会ではロンドンで制作した作品の展示とCSMの展示スペースで展示した模様も画像で示した。CSMの展示は遊工房でのそれに比べて点数こそ少ないがスペース自体が大きなヴィトリヌのような造りなのでその中で見る彼の作品はイメージが中空に浮いているように見え、作品のなかで扱われている空のイメージがより際立ち作品構造との統合がよく取れているように思えた。堀内さんは映像作品で、日常的なシーンの断片を繋ぎ連続的に見せながら全体を覆う“或る感情”を表出していた。或る感情とは、

彼女のこれまでの作品全体に通底している空気感だ。それは、作家の身体が次々に移動してゆく際に受けとめ置き去りにしてゆく場と時間、それらの中にさらされた光や風景やオブジェを眺める作家の心身の揺れ動きだ。また、現地で描かれたドローイングにもそれが映っていた。今年もアーティスト達は、双方の場の体験を制作に反映し、同時に作品の中でそれぞれの思考の経緯と痕跡が見て取れた。その成果は、作品として目に見え手に取れるものとして、同時に不可視のもの、身体に記憶されたことを、作家たち本人が誰よりもよく知っている、ということだろう。

来年度は継続してこのプログラムの実施とともに、5年目の一区切りとしてこれまでのプログラムに参加したアーティストの制作と展示を東京とロンドンで展示できないか、その可能性を現在検討している。東京とロンドンの両校から輩出された優れたアーティスト達がそれぞれのAIR、Studioでさらに自らのアートを鍛え深化させることの意義は大きい。ならばその後の更なる展開もまた大いに興味あるところだ、あの時から何が変化し、何が依然として探求され続けているのか、その「現在」を一望してみたいと思っている。

今回のプログラムに全面的にサポートしていただいたACMEと遊工房、セントラル・セント・マーチンズ校と東京藝術大学に感謝を申し上げる。またこのプログラムの期間にCSMの教員であり映像作家であるグラハム・エラード氏も東京藝大の연구원として来日しており、東京で再会できたことは私にとっても大変嬉しいことであった。またその間に氏は今回の遊工房での展示を観ていただき、直接アーティストに講評をしていただいた。そのこともこの場をもって氏に深く感謝を申し上げたい。



LTYEプログラム2018活動概要

2018年は、LTYEプログラムの継続4年目にあたる。その継続と共に、プログラム内容として相互に毎年工夫が重ねられ充実したものになってきていることが分かる。双方の運営者同士の努力に感謝と敬意を払いたい。そして、この充実には運営側ばかりでなく、参加体験者の実体験からのフレッシュな意見のフィードバックがあるからこそと、2018年の活動を通して改めて感じている。双方の関連教官との率直な対話もその一つである。特に2018年は、Graham先生の東京での研究滞在の機会、OJUN先生の遊工房でのグループ展の開催などのめぐりあわせが背景にあったことも幸いした、若手作家のAIR体験機会 —LTYEプログラム2018であった。

・活動期間：2018年5月1日～7月31日（前半6週間、後半6週間の合計3か月）

第1グループ：前半の6週間のロンドン、後半の6週間の東京でのそれぞれの活動。

第2グループ：前半の6週間の東京、後半の6週間のロンドンでのそれぞれの活動。

尚、東京参加作家は、活動成果報告展を8月に開催

・活動の場：東京：遊工房アートスペース（杉並）、他に東京芸大上野校地、取手校地ほか

ロンドン：CSM・ASP（Stocwell Studio、High Line Studio）、他にCSM校Kings Cross校地ほか

・参加作家：第1グループ：堀内悠希、Tuli Litvak

第2グループ：川越健太、Alice Jacobs

・活動内容：活動導入（プログラムの流れ、日程計画、生活ガイド）、作家相互紹介（Artist Intor）、提携校キャンパスツアーと交流

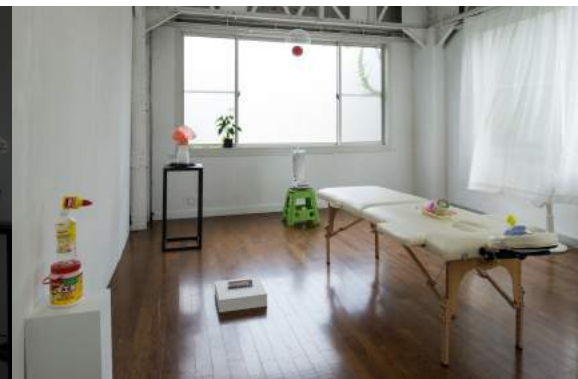
調査研究／制作／展示発表／批評会

批評会参加専門家（敬称略）：東京：山本和弘（栃木県美）、林卓行（東京芸大）、OJUN（東京芸大）、Graham Ellard（ロンドン芸大・CSM校）、他

ロンドン：Graham Ellard（ロンドン芸大・CSM校）、Mark Dunhill（ロンドン芸大・CSM校）、他

		5月	6月	7月
活動場所	第1グループ	ロンドン活動		東京活動
	第2グループ	東京活動		ロンドン活動
主要活動	活動導入	*	*	
	調査・制作	随時		随時
	発表（展示/Open Studio）		*	*
	批評会		*	*
	交流会	随時		随時





「One Day in the 136 Bus」

堀内悠希



最初それは平坦なただの紙だった。
次に真ん中に一筋の左右を横切る太い線が現れる。そして二つの点、左中央、
太い線のすぐ下に一つと、もう一つはもっともっと右下。

人によって場所や空間の認識方法は異なる。わたしの場合、地図はいつも東西南北が正しく固定されていて、かなり俯瞰になる。ショッピングセンターや駅よりも、街を横切る大きな川や幹線道路こそがランドマークだ。次第に薬局やパン屋さん、スーパーマーケットが現れる、川は細かにうねる角度を修正される。この地図においては、何よりも東西南北の固定されていることは確かであるから、待ち合わせの時に「駅から出て右手の角を…」などと言われるのが一番困ってしまう。頭の中でこの地図を回転させるのは一苦労なのである。大きな街だと、その地図を充実させることだけで非常に大変な作業になる。地図を拡張するところまでたどり着くにはさらに時間がかかるだろう。境界が見えぬ。語りえぬもの、沈黙しなければならない領域…。



さて、わたしはロンドンに滞在している間、大概はバスに乗っていた。バスのルートもまた、その大きな地図によって東西南北を正しく理解されていた。いつも南東から北西へ。帰りは逆。バスは地下鉄より安い。1.5£でどこまでも行ける。二階建てのバスからサウスロンドンの人々の暮らしを眺めた。午後9時、美しい夏の夕暮れの、薄暗闇の中オレンジ色に光る家々の窓を眺めるのは最高だ。これはわたしの唯一の娯楽だと言ってもいい。東京でもよく当て無く文京区や新宿区の外れを散歩し、異なる暮らしを持つ人たちの気配を感じた。その両者(わたしと那些人たち)の関係はずっとずっと不思議だ。永遠に入れ替わることはない、羨ましいとも違って、なぜわたしの目はわたしの目であるか考えるようなことだったと思う。そういう散歩の後にはいつでも、1秒1秒を正しく1秒と感じれるような、非常に充足した気持ちになった。地に足がついている。

colour my life with the chaos of trouble/ 'cause anything's better than posh isolation/ I missed the bus
("The Boy with the Arab Strap" Bell & Sebastian)

136番のバスから見える夕暮れの風景には、なぜだか美容院がたくさんあって、そして店内にはもれなくご近所さんたちが登場した。すぐ近くの通り、Old Kent Rd. はロンドン版モノポリーで最も地価の安いところだった。ある日、バスにはわたしと若いカップルだけが乗り合わせていた。その時もまた午後9時ごろで、136番のバスがまさに南東に向かって走っているところだった。しばらくして、女の子は「次のバスストップで家族が乗ってくるわ。また明日ね。」と男の子に言った。わたしは彼らの会話を理解していた。二人はキスをして、男の子が後ろの席に移動した。家族が乗って来た。お母さんとおばあちゃん、妹が二人とさらに弟。妹の一人は一番前の席が良くて、たくさんの空席があるにも関わらずわたしの横に座った。男の子と女の子はそれ以降言葉を交わさなかったし、振り向きもしなかった。女の子はカップルから家族の一員になった。わたしはいくつかの停留所の後、バスを降りた。家族も男の子もまだバスに乗っていた。「ごめんね、通してね。」と声をかけて家族の横を通り過ぎたが、後方に座った男の子がその家族の長女のボーイフレンドであることはもちろん内緒にしておいた。わたしは彼らの赤の他人であったけれども、誰も気づかない間に、その街での役割を演じきったのだった。

「写し換えの道具」

川越健太

ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館の一室に『クロード・グラス』という道具が展示されていた。これは楕円形の凸面鏡に黒色の反射膜を塗布し蓋付きのコンパクトミラーに設えたもので、18世紀後半の人々が旅行に携行し、鏡面に風景を写し込み眺めるために用いられた。その名称はバロック期に活躍した画家クロード・ロラン（1600-1682）から採られており、この道具を使えば、ロランの絵画のような風景を手中に収め眺めることができるというわけだ。振り返ってみれば、この『クロード・グラス』との出会いが、ロンドン滞在中の制作を方向付けることになった。

欧州連合からイギリスが脱退する、いわゆるブレグジットの履行が2019年3月29日に迫っている。ヨーロッパ圏での各方面における戦後の協調・統合路線は大きな転機を迎えることになるだろう。文化多元主義を標榜しつつも、グローバル化する社会のなかでなお残り続ける違和感や不満がこうした現象に力を与えたとするならば、私達はこれから現状に替わる理念を模索していかなければならないのかも知れない。こうした問題について考えるために、私は近代化する途上の時代に何かヒントがあるのではないかと直感的に考えた。

そのようなわけで、私の関心は遊工房アートスペースでのスタジオ・レジデンス期間で取り組んでいた問題と連続して、ジョン・コンスタブル（1776-1837）、ウィリアム・ターナー（1775-1851）、ウィリアム・モリス（1834-1896）、ルーク・ハワード（1772-1864）などへと向けられ、コンスタブルを中心的な軸としてそれぞれを参照しながら制作を進めた。

コンスタブルの絵画は極めて明確に構造化されている。中心性、対称性あるいは非対称性、それらに伴う視線の誘導と対応するモチーフの運用。こうした構造をある種の道具として用いることはできないか。そのようなアイデアから東京での期間ではコンスタブルの絵画を下絵として、半立体的なフォト・コラージュを制作した。また、ロンドンでのアクメ・スタジオ滞在期間には、雲の発生条件を構造化したハワードの研究とコンスタブルの『クラウド・スタディ』シリーズと比較しつつ、モチーフとして制作を行った。

両滞在期間での制作において共通している部分は、スコアとでも呼ぶべき設計図の導入と、その設計図を元にした転写操作による形態の複製である。このスコアに従って作品の構成と形態は決定されている。形態はシリーズとして透明な連続性を保ちながらも、外観に用いられる写真がそれぞれ違う色調や具体的なイメージを個体的な差異として獲得していくことになる。

計画された偶然性とでも言うような外観を組織する、バラバラな断片同士を繋ぎ合わせる規則をどのようにして作ることができるか。コンスタブルの絵画を検討することから、この問いにひとまずの形を与えることができた。

『クロード・グラス』に取り付けられた蝶番は、ただ鏡面と蓋面を接合するためのものではなく、現実と変換されたピクチャーを繋ぐ道具でもあった。そのような道具としての性質について、作品を通して継続して考えていきたいと思う。

最後に、山本和弘様、本間かおりさんとご家族、アクメ・スタジオ滞在中にサポートしてくれたスタジオメイトの皆さん、とりわけジャン＝パティスト・ラガデック、『クロード・グラス』について、また多くのご助言を下されたグラハム・エラード先生、マーク・ダンヒル先生、今回貴重な機会を与えて下さった遊工房アートスペースの皆様、O JUN先生、そしてこのプログラム中、東京、ロンドンでの制作・滞在をサポートしてくれたアリス・ジェイコブスに感謝の意を表したい。



「Finding words to go around」

Alice Jacobs



No Words To Go Aroundは、LTYEプログラムでの成果である。6週間、私は日本の集団意識に反する行為として歴史的に存在してきた、舞踏様式について研究を行った。私は特に、舞踏の修練の或るもので再生を意図していた、身体離脱に惹かれた。

私の伝統的な舞踏修練への興味は、行動主導で破壊的戦法のその具現化にある。大野一雄のスタジオに度々訪れている内に、舞踏・パフォーマンスから伝わってくる、その言語は、言葉の意味が無関係になるほどの独特のパフォーマンスであった。それを自ら体験した。それは舞踏の人たちが自然に行って来た、言語や論理の意味に関わらずに、コミュニケーションの様式を探求するという私の活動にある。

技術を超えて、私自身を明白に映し出すのは、身体が必要とされなくなった歴史的瞬間への、より一般的な関心である。リサーチで出席する機会を得た東京大学の嶋田佳子先生のフェミニストの講義によって、私の作品の象徴を思い知らされた。彼女のリサーチは、近代における女性性の成立、とりわけ第二次世界大戦後の米占領開始時に、恥辱的であろうと生きるための必要な糧を得るために存在した日本の娼婦に関する論文や記録の追跡である。

私の活動の中心は、オブジェクトを自分のパフォーマンス空間に充当することによって、オブジェクトに与える意味に挑戦しようと試みることである。通常オブジェクトとの出会いは、それらの場所を越えるフラストレーションで特徴づけられる。そのため衝動による行動と意味が切り離せない状況を導く。コミュニケーションは主に行動を通じて自分を表したので、言語の障壁による経験の孤立を受け入れた。

私のパフォーマンスの写真資料を見せるという意味は、劇的な誘惑を際立たせるための更なる意図と共に生まれた。これらは武蔵野美術大学の池田哲先生が担当する授業にゲスト講師として登壇した際にそれらを提示し、その反応によって作られた。私が誘引した行動が一時的に広がり、それらは後に重要な視覚的図像となる。

遊工房から頂いたご支援には心から感謝している。また、芸大で制作にご協力いただいた田中先生、私のリサーチのために大勢ご紹介いただき、繋がることのできた素晴らしい方々との出会いの機会がなければ、私は今回のプロジェクトを遂行することはできなかった。

「体験を通して考えたこと」

Tuli Litvak

私には東京に来る前に幾つかの互いに関連しているトピックに関心を抱いていた。それを滞在中に、新しい文脈の光として異文化で、研鑽の手段に使おうと考えていた。最初の、私の活動の指針の基となるものは、家庭または公共で、空間設計が、それを体験している個人の内的精神的な処に影響を与えるかどうか、また、どのように公衆に影響を及ぼすかという関心である。特定の空間設計を導く哲学が、その社会を反映していることを明らかにし、そのことを通して文化間の影響と交流を明らかにすることができると思う。

別の関心事は、これは最初のものからの派生であるが、健康、そして全体的な広い観点から、肉体的、精神的両面の幸福ということにある。

そして最後に、デヴィッド・リンチが、自身の映画で'reality'（世界の形而下の空間）に、彼のキャラクターの精神的な場を最前に持っていく、という手法に興味を持った。これにより、視聴者は知覚として自己を意識することができる。ラッセル・マニング博士の「David Lynchの哲学」（William J. DevlinとShai Biderman編集）の中のエッセイで、彼は、歪んだ現実、空想、または誤った認識を記述するのではなく、しかし、私たちの真の一人称的視点を世界に描く言葉として、ファンタジー（Žižekに続く）という言葉を使用している。

「私たちは、管理しやすい距離で不安を留め置くために、ファンタジーを使う、私たちは皆、世界の中の自分たちを考える時、皆がそのような幻想の方法を使っている。言い換えれば、私たちのファンタジーは、世界の恐れから逃れ、匿うために創り出す「空間」である。」（R. Manning, p.77）

彼は、リンチの映画の中で、私たちに示された形而下の「現実」は、実際には、そのファンタジー、すなわち、そのキャラクターの心の中の現実の認識であると主張している。

（これはおそらく、かなり明白な結論だが、興味深い説明だと思った。）

日本での私の体験、かなり抽象的で「不明瞭」なその断片を短編映像にクリップし記録し、編集を通し「意味」または「論理」を探し出してみることによって、私が出合った新しい具体的な場所に、自身の認識/内的空間を写しだすことを集めるのは大変興味深かった。 と同様に、遊工房での私のレジデンス経験の「素晴らしい」物語を語る事ができる。これらは、同じような「論理」に従って私が英国で撮影した、断片映像と混在していた。

私が同時に行っていた別の映画プロジェクトは、パフォーマンスを通して、健康の管理と維持の実践について学んで来た私の知見に素晴らしい手応えがあった。私は遊工房のディレクターとのインタビューを通し、村田博士が開業していた診療所であった遊工房の歴史をリサーチした。私は彼の認識の進化に、どのような優れた保健医療が行われ予測されたかに興味を持った。同時に、当然のことながら日本の医療界は、さまざまな時期に一般的に良い慣行とみなされていたものに影響された。この進化は、日本の医学界が伝統的な日本と東方の慣行から西洋の実践に向ったという歴史的な話を興味深く反映している。しかし、時間の経過とともに、最終的に西洋と東洋の両方の手法を対称的に取り入れ実践するようになり、より古来のより多くの地域の慣習に対する再考と新な知が高まっている。建築と同様に、如何に医療行為を通し、文化的交流を観察することがきるかが見えたことは興味深かった。

パフォーマンスを通じて、私は、前記の現代のコミュニケーション/テクノロジーのレンズをとおし、例えば「伝統的な治療の実践」においてスマートフォンを医療機器として使用することにより、それを反映させる試みをした。

私は遊工房チームが示してくれた誠意ある支援に深く感謝している。この機会が真に私の研鑽を深め発展させ、日常生活で見出だすことが難しい、修練の時間となった。



LTYEプログラム2018活動の総括、2019へ向けて

毎年の活動は参加体験者からの生の声を聴くは、継続するプログラムへの重要な改善のヒントになっている。活動成果のフィードバックは、運営者からの回答用紙を基にしたインタビュー形式で行われた。4年目の参加者は、これまでの参加体験の内容を事前に聞く機会もあり、自らの体験の現実との比較も可能で、建設的な改善意見も出てくるようになった。

初めに、双方のプログラムの違い、場の背景の違いも十分に考慮する必要があるだろう。両都市での滞在制作活動は双方の作家にとって、6週間のAIRの体験と、東京側の作家にとってはロンドン体験に前後して継続する東京での6週間のプログラムがパッケージされ、トータル3ヶ月の活動となる。ロンドン側の作家にとっては東京滞在の6週間の体験プログラムで完結していた感がある。昨年からは、双方の交換作家同士の相互交流的な関係性を期待するように改善され、今年はさらに発展して相互扶助的な関係性を期待する本格的な試行となった。

ロンドン側の作家にとっては、東京での滞在制作は、AIRプログラム参加そのものであること。東京の作家は通いの遊工房でのスタジオ活動プログラムがパッケージされ、その間の遊工房滞在作家の1人にこのプログラムのロンドン若手作家が並行して活動するという実態である。並行して滞在する作家同士との交流のが遊工房での活動の大事なミッションとなっている。まだ十分な交流への踏み込みに至ったとは思えないが、今年なりの前進に満足したい。

一方、ロンドンのASPのシェアスタジオは、個々の作家活動がベースで、作家との出会いは限定されてしまう現実もあり、応募時点での工夫が必要であるかもしれない。

初めてのAIR体験が多く、活動体験の新鮮さは共通するも、当初の計画と現実の差は、今後の作家活動への原動力となったと確信する。

活動内容からの視点では、活動開始時の作家活動相互の情報シェア（Artist Introduction）、活動終盤時期での専門家交えての批評会（Critique Session）は相互研鑽の大事な機会となっている。オープンスタジオ、展示会開催については、期待と現実の開きは、作家自身の良き課題になっている。無論、プログラム運営側の工夫も継続すること。

フィードバックからの成果、課題の読み取りと共に、双方のプログラムの基本的違いの相互の認識・理解をベースにこのプログラムの継続を進め、若手作家へのAIRの価値、限りない可能性を、Y-AIRの実践を通し進めたい。

2019年は、LTYEプログラムの継続と共に、5年目の節目を機会に、これまでのプログラム参加体験作家16名のその後をフォローし、プログラムの価値、評価について検証する年とする継続プログラムは、一層の若手作家同士の交流機会に繋ぐ仕掛けとしての充実を図ることに力点を置き、また、5周年を記念するプログラム「アイ・ミ・タガイ」としてスタートさせた。これまでの活動体験作家のその後を、関係者全員で共有し、相互の議論を含むグループ展示・交流会の場を開催する。このプロジェクトは、2019年東京で、2020年ロンドンで開催することで相互の計画が始まっている。

